

情報構造から観るヘッドラインに用いられた 発表・発見および調査の意味の受動態

松 倉 信 幸

1. はじめに

ヘッドラインには簡潔さと明確さが求められるのは言うまでもないが、これに加えて、読者に対して注目を引くものでなくてはならない。本稿では、ヘッドラインに用いられた受動態がどのような要因で用いられたかを、読者の視点から、受動文の主語と過去分詞および共起している場合にはその動作主との関係から、主題構造および情報構造の知見を用いて考察を加える。

簡潔さと明確さが最重要視されるヘッドラインにおいて、最適な例として、本稿で用いた過去分詞の言語事実は、「～が発見（発表）された」および「～が調査された」という他の語義と比べて、単純かつ明快な意味を有する過去分詞に加えて、さらにこれらと意味が類似する知覚動詞の過去分詞を取り上げた。

先行研究として、受動態が用いられる理由について、この研究の先駆者として Jespersen (1924) があげられるが、最近の研究では Declerck (1991) および Swan 第3版 (2005) において、実例を用いて詳細な説明がなされている。本稿では Declerck の例を取り上げて考察を試みる。

ヘッドラインの表記について述べる上で忘れてはならない点は、読者の存在である。読者の注意を引き、あるいは少し大げさに言うならば、読者の視線を釘付けにする上で、受動態を用いた表記のいったいどんな要素に読者の注目が集まっているのかという点について分析を行う。

さらに、'seen,' 'found,' および 'heard' といった知覚動詞の過去分詞も取り上げる。これらの過去分詞は「発見・発表」の過去分詞と意味が類

似するため、これらの過去分詞も含めて、筆者が独自に集めた「発見・発表・調査」の意味の言語事実を用いて、過去分詞の形態と機能および過去分詞と共起する 'by' + 動作主の機能についても分析を行い考察を加える。

2. 受動態の選択理由と読者の視点

先行研究として、受動態が用いられる理由について、Declerck (1991) は以下の6つの事例をあげている。(1) 不明瞭あるいはあいまいな動作主のため (indefinite or vague agents)、(2) 自明な動作主のため (self-evident agents)、(3) 強調された動作主のため (emphasized agents)、(4) 転換された動作主のため (converted agents)、(5) 情報原理および主題の連続性のため (information principle and theme continuity)、そして(6) 重量となる動作主のため (heavier agents) といった6つの要因をあげている。^注

上記にあげた要因も受動態が用いられる要因として参考になるが、本稿では新聞のヘッドラインに用いられた受動態について取り上げているため、いかに読者の興味を集めるかという要素も求められる。ヘッドラインのどこに読者の視点が置かれているのかという点から次節にて分析を行う。

2.1. 読者の注目を引く主語

著名な固有名詞の主語および社会的に広く話題になっている普通名詞の主語を受動文の主題として取り上げる。統語構造から、能動態は無標 (unmarked) の形であるが、他方で受動態が有標 (marked) の形である。したがって、受動態は意図的に用いられた形態と言える。そこで、受動文の主題として、下記の(1)から(5)の見出しに著名人やその関係者、および(6)から(8)ではしばしば社会で話題になっていることがらが文の主題にかかげられた場合、読者に注目されるのが自然である。これらのどの例にも動作主は見られないが、ここでは動作主は自明であったり、むしろ動作主には関心がないものと言えよう。

(1) Top Australian athlete probed

(*The Japan Times*, July 21, '04)

(2) Clinton adviser Berger probed

(*ibid.*, July 22, '04)

(3) Ronaldinho investigated

(*The International Herald Tribune*, March 17, '05)

(4) Young Dodgers GM DePodesta tested (*USA Today*, July 22, '05)

(5) Athens athletes may be tested for HGH (*The Japan Times*, July 30, '04)

(6) Bird flu reported in 11th Vietnam province (*ibid.*, July 29, '04)

(7) Pig cholera outbreak seen at farm (*ibid.*, July 23, '04)

(8) Suspect's trip to Pakistan investigated

(*The International Herald Tribune*, July 22, '05)

2.2. 主語とその事態の結果に読者の注目が集まる過去分詞

本節に見られる下記の (9) から (12) の例についても、上記に見られた例と構造は等しいが、意味の上から受動文の主題は上記のような具体的な固有名詞ではないため、主題に対する読者の注目度は低い。しかし、この場合は文末の過去分詞に読者の視線が注がれる。その理由は、構造上受動文の主題は旧情報であり、過去分詞が新情報を担っているからである。

(9) Dangerous diesel fumes identified (*The Japan Times*, July 22, '05)

(10) AFL-CIO leader is re-elected despite major union defections
(*ibid.*, July 29, '05)

(11) Algerian president easily re-elected (*ibid.*, April 11, '04)

(12) New social insurance head appointed (*ibid.*, July 12, '04)

2.3. 補語に読者の注目が集まる過去分詞

下記に取り上げた例文に見られる (13) の 'appointed,' (14) と (15) の 'named,' (16) の 'awarded,' そして (17) の 'identified' は、意味上広義の発表の意味として取り上げた。また、これらの過去分詞の例は上記で取り上げた例と構造上、補語が共起している点が異なる。

(13) Hosokawa appointed vice finance minister
(*The Daily Yomiuri*, June 27, '04)

(14) Danforth named U.S.' new U.N. ambassador (*ibid.*, June 6, '04)

(15) Mexican city named world's deadliest (*The Japan Times*, Aug 28, '09)

(16) Polanski awarded £50,000 over libellous magazine article
(USA Today, July 21, '05)

(17) Rove, Libby identified CIA officer
(ibid., July 18, '05)

また、下記の (18) から (20) の例は 'as' に導かれた名詞句が過去分詞と共起している例である。いわば補語を導く認知標識として、この 'as' が文末重点の特性を際立たせているといえよう。したがって、読者の視線はこの文末に集まるのである。さらに下記の (21) では、前置詞として 'to' を用いた例も見られる。

(18) Remains are identified as missing Idaho boy's (USA Today, July 11, '05)

(19) Edwards picked as Democrats' No.2 (The Japan Times, July 8, '04)

(20) Hashimoto to be called as witness
(The International Herald Tribune, July 28, '05)

(21) Woman appointed to senior position in Catholic Church for first time
(The Japan Times, April 26, '04)

3. 過去分詞の機能と意味

受動態をヘッドラインに用いる基本形かつ最小単位は「受動文の主語＋過去分詞」であって、この形そのものは2語からなる非常にシンプルな形に違いないのであるが、その反面受動文は有標であり、意図的に能動文から変換された形である。この「受動文の主語＋過去分詞」を元にして、この形の右側に準動詞および補語などの文法機能が付加される例が見られる。これらを加えることによって、文末重点化が一層その効力を発揮して、形は小粒ながら読者によりインパクトを与えるヘッドラインに仕上がる。本章では、この過去分詞の位置と機能および意味について考察を加える。

3.1. 文頭に用いられる過去分詞

ヘッドラインに下記の (22) および (23) に見られるように、唐突に 'Revealed' と過去分詞のみ置かれることで、何よりも読者の視線をとらえることは間違いなく、読者はこの語の続きを、「何が明かされたのか」

と気になって読ませられるのである。この唐突な過去分詞の使用は、ヘッドラインにおける受動態の効果的な手法である。

(22) Revealed: Our worst train lines (The Sunday Mail, Feb. 22, '04)

(23) Revealed: the Bloodgate bunglers and Harlequins' secret cheat file
(The Times, Aug. 20, '09)

3.2. 否定語の文頭への前置

日本語とは全く正反対に、文頭に否定語を置くのが英語の特徴である。この形は動詞を否定する通常の表記とは異なり、短く簡潔な表現として、ヘッドラインにおいて好まれ、下記の (24) と (25) の例のようにしばしばヘッドラインに見られる。今回調査した例のなかで、述語部分を否定する形は見られなかったことから、受動態が用いられるヘッドラインにおいては、文の長さも制約されるため、この否定語を文頭に置く形が一般的であるととらえられる。

(24) No mad cow disease found in animal singled out in screening
(The Japan Times, July 3, '04)

(25) No toxins found in Iraq warheads (ibid., July 5, '04)

3.3. 未来の予定

ニュースの特質として、これから実施される「予定」および「予告」を読者に伝えることはより重要な役割である。ヘッドラインにおいて、この「予定」や「予告」を告げる受動態表現がしばしば見られる。本節では、この意味を表すいくつかの文法形式について取り上げ、それぞれの機能について分析する。

3.3.1. 受動不定詞

ヘッドラインにおいて下記の (26) から (29) の例に見られるように、受動態に 'to' 不定詞が先行する場合には、これから実施される未来の予定を表す。これは未来志向性を帯びる 'to' 不定詞で、過去分詞は受動不定詞の形である。

(26) Thalidomide therapy to be tested

(*The International Herald Tribune*, July 21, '05)

(27) 'America's tailpipe' to be examined (*The Japan Times*, July 4, '04)

(28) Muslim cleric to be monitored while in U.K. (*ibid.*, July 10, '04)

(29) Kabuki to be nominated for UNESCO heritage list (*ibid.*, July 18, '04)

次に取り上げる (30) から (34) の例は、「発見・発表・調査」の意味とは異なる過去分詞であるが、「未来の予定」を表す例であり、ヘッドラインにしばしば登場する決まった形と言えるため取り上げた。下記に見られる過去分詞 'set' はいずれも形容詞化した過去分詞形容詞と考えられ、「未来の予定」を表すイディオムと捉えてよい形である。

(30) That Venti Frappuccino? Get set to pay more for it

(*The International Herald Tribune*, Aug. 22, '09)

(31) Porsche set to build its first 4-door model (*The Japan Times*, July 29, '05)

(32) Ogi set to become first female president of Upper House

(*ibid.*, July 30, '04)

(33) Wendy's set to chase Burger King from No.2 spot (*ibid.*, July 12, '04)

(34) That Venti Frappuccino? Get set to pay more for it

(*The International Herald Tribune*, Aug. 22, '09)

3.3.2. 法助動詞 must

下記の (35) から (37) に見られる通り、未来を表す法助動詞の 'must' と共起する例もしばしばヘッドラインにおいて目にすることがある。この形式の場合、これまでの形式よりも 'must' の意味によって、「未来の予定」の意味では最も実現可能性が高い意味合いを帯びているということが言えよう。

(35) Moderate Islam's voice must be heard (*The Japan Times*, July 13, '04)

(36) Moral heroes like Vanunu must be heard (*ibid.*, April 26, '04)

(37) Latham must be watched (*The Australian*, Feb. 25, '04)

3.4. 文末重点機能

英語の特性として、比較的重い要素を出来るだけ文末近くに持ってくる性質があり、これを文末重点 (end-weight) と呼ぶ。情報構造において、文頭すなわち受動文の主語が旧情報に相当し、この文末重点の部分に相当する過去分詞以下が新情報に相当する。受動態がヘッドラインに置かれ、文末重点化がなされる場合には、過去分詞に後続する語句をいかに接続するかが重要になってくる。本節において、この文末重点の機能を担う過去分詞に後続する語句について、分析し考察を加える。

3.4.1. 過去分詞 + to do

下記の (38) と (39) の 'to' 不定詞を後置する形式は受動態において、しばしば見られる。この 'to' 不定詞と過去分詞が共起する場合と、過去分詞のみの形を用いた場合とを比較すると、これらの文法機能の後置によって下記の (38) と (39) は一層の文末重点化が機能していると言えよう。

(38) Movies found to change hormone levels (*The Japan Times*, July 25, '04)

(39) 'The PWC report must not only be open but be seen to be open – in contrast to the HomeSide report' (*The Weekend Australian*, Feb. 21, '04)

3.4.2. 過去分詞 + 補語

補語を後置する過去分詞は 'found' であり、後続する補語は下記の (40) から (42) の 'dead' に加えて、(43) の 'alive' が見られる。さらに (44) の例に見られるように 'to be' と共起する場合もある。これらの補語は主語の状態を描写するために付加された機能と言えよう。

(40) Alleged killer found dead in Canada (*USA Today*, Aug. 24, '09)

(41) Fading entertainer in 'revenge plot' is found dead in cell
(*The Times*, Aug. 21, '09)

(42) Kirk Douglas' youngest son is found dead
(*The Japan Times*, July 9, '04)

(43) 'Murdered' woman is found alive after 55 years
(*The Times*, Aug. 22, '09)

(44) Genetic mutation found to be factor in juvenile diabetes

(*The Japan Times*, July 13, '04)

3.4.3. 過去分詞 + 前置詞句

過去分詞に後続する形で、最も多いものは下記に取り上げた前置詞が後続する場合である。下記の例の (45) から (50) に見られるように、過去分詞に後続する前置詞句は場所を表しており、おおよそ「どこで」見つかったかを文末に添えて、そのニュースの焦点とも言うべき文末重点化および新情報を担っている。

(45) Carcinogen discovered in dust of World Trade Center

(*The Japan Times*, July 29, '04)

(46) Chess great is 'checked' at Narita immigration (*ibid.*, July 18, '04)

(47) Dot-com echoes seen in hot housing market

(*The International Herald Tribune*, March 26, '05)

(48) 6000 B.C. house found in Bulgaria (*The Japan Times*, July 27, '04)

(49) Lethal strain of bird flu found in Russia, Kazakstan (*ibid.*, Aug. 4, '05)

(50) Bird flu reported in 11th Vietnam province (*ibid.*, July 29, '04)

また、上記の場所を表す前置詞の他にも、下記の (51) と (52) の例も見られる。これらの前置詞句は過去分詞と共に文末重点化がなされている。

(51) Is Japan really poised for change? (*The Japan Times*, Aug. 28, '09)

(52) 'People's war' declared on Chinese Web porn (*ibid.*, July 21, '04)

3.4.4. 動作主を導く by 句

受動文において、動作主の 'by' 句を導かないのが一般的であり、ヘッドラインにおいても同様に、動作主を導かない例と比較すると動作主を導く例は圧倒的に少ない。一方でこの動作主と共起する要因は、先の第2章に掲げた (1) から (6) までの理由のうちの (3) 強調される場合、(5) 情報原理および主題の連続性の場合、そして (6) 重量となる動作主の場合の3つに該当する。

下記に見られる例はこれらの中の(3)の強調の場合と言えよう。したがって、下記の(53)から(56)の例に見られる通り、過去分詞が動作主と共起する場合には、文末重点化の機能を十分に満たしているものと言えよう。

(53) Strong economic growth predicted by G-7

(*The Japan Times*, April 26, '04)

(54) High-speed internet price war declared by providers

(*The Australian*, March 2, '04)

(55) Softly, softly approach seen by interviewers as key

(*The Times*, July 28, '05)

(56) Feeling really good: Little recovers from his transplant operation in Sydney's RPA Hospital, watched by Aboriginal liaison officer Ruby Blakeman

(*The Australian*, Feb. 18, '04)

4. おわりに

本稿はヘッドラインに用いられた受動態を読者の視線から情報構造によって分析を試みた。受動文の最小単位は「受動文の主語+過去分詞」である。しかし、この簡潔で明瞭な紛れもない構造には、背後に無標である能動文の目的語を旧情報として文頭に主題化させることによって、有標となった受動文の主語に読者は関心を示し、「その事態の結果はどうなったのだろうか?」と、読みたいという意欲を呼び起こさせる新情報を過去分詞+αに担わせた実に技巧的な面を持ち合わせている。この過去分詞に後続させる文法機能として、to不定詞や補語および前置詞句が過去分詞とともに新情報を担い、一層の文末重点化機能の役割を果たしていることが理解出来る。もう一方で動作主を導く例はめったにないのが一般的であるが、まれに見られる動作主と共起する過去分詞の場合には、その動作主を強調し、文末重点化をより高めた構造によって、読者の関心をより一層呼び込みたいという意図が伺える。

注

Declerck (1991) は以下の 6 つの事例をあげている。

- (1) This church was built around 870 AD.
- (2) All necessary information will be sent to you.
- (3) The order to arrest the leader of the opposition was given by the Prime Minister himself.
- (4) The escaped leopard was caught again two hours later.
- (5) a. A goal has just been scored by Bill.
b. The Pope arrived in Madrid this morning and was immediately besieged by reporters.
- (6) I was surprised by John's decision to join the army. (Declerck, 1991: 211-213)

参考文献

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman. 935-943.
- Declerck, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha. 200-213.
- Givon, T. (1993). *English Grammar. A Function-Based Introduction II*. John Benjamins Publishing Company. 45-78.
- Huddleston, R, & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press. 1427-1447.
- Koike, J. Sadakoto, Tomoyuki Koike, and L. Curtis, (1993). *An Analytic Study of Journalistic English*. Otori Shobo. 37-39.
- Matsukura, N. (2005). "On Passives Occurring in Newspaper Headlines." *CAMPANA Suzuka International University Journal*. 147-152.
- 松倉信幸 . (1990). 「VOICE の情報構造と主題について」『八王子英文学論叢第 1 号』 35-50.
- 村田勇三郎 . (1982). 『機能英文法』大修館書店 . 220-309.
- Palmer, F. R. (1994). *Grammatical Roles and Relations*. Cambridge University Press. 117-141.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman. 159-171.
- 斎藤武生, 原口庄輔, 鈴木英一編 . (1995). 『英文法への誘い』 開拓社 . 150-166.
- 鈴木英一 . (1990). 『統語論 現代の英語学シリーズ第 5 巻』 開拓社 . 220-257.
- Swan, M. (2005). *Practical English Usage*. (3rd Edition). Oxford University Press. 407-414.

情報構造から観るヘッドラインに用いられた
発表・発見および調査の意味の受動態

安井稔.(1989).『英文法を洗う』研究社.104-142.